

## 平成4年度日帰り人間ドックの成績

厚生連滑川総合検診センター

小川 忠邦, 川口 京子, 松井 則子,  
岸 宏栄, 保井 陽子, 早崎 智美,  
砂田 誠一郎, 谷川 秀明, 上田 孝子

### はじめに

滑川総合検診センターにおける日帰り人間ドックは、継続受診者が大半を占め、農協組合員の検診様式としてそれなりに定着してきている。しかしこれは逆の見方をすれば、受診者の固定化と云うことになり、まだまだ多い未受診者や間欠的受診者に対する対策が一層必要になると考えられる。一方では、農協職員検診としての利用も年々高まっていることは喜ばしいことであるが、ここ数年当検診センターの受け入れ能力は既に限界状態にあって、これ以上の受診者増には対応できないのが悩みであり、早急に解決策が望まれる。

今年度は検診内容の変更は殆どなく、従来通りのメニューで実施した。ただし、CRP反応は廃止した。以下に平成4年度の成績を、従来と同じ方式<sup>1)</sup>に従って分析を加えながら述べる。これは主に一次検診の段階での成績であるが、発見癌など確認されたものについては、その内容についてそれぞれの項目の中で記載した。

### 成 績

#### (1) 受診状況

表1は年代別性別受診状況を示したものである。受診者総数は5,310人で、前年度より252人、5.0%増加した。既に当センターの対応能力の限度を越えている人数であり、しかも10月以降は月2回の週休2日制の導入によ

表1 年代別・性別受診状況

	男	女	計	%
～29才	46	22	68	1.3%
30～39才	271	228	499	9.4%
40～49才	720	887	1607	30.3%
50～59才	631	947	1578	29.7%
60～69才	638	737	1375	25.9%
70才～	118	65	183	3.4%
計	2424	2886	5310	
%	45.6%	54.4%		

って、日程消化にかなり無理があったと思われる。関係者各位の努力を評価したい。男女別では男45.6%、女54.4%と前年度より女性の割合がやや増加した。年代別ではこれまでと同じく、40～69才が全体の85.9%と大部分を占めたが、この中で40才台女性の増加が特に目立ったために、最も多かったのは前年度の50才台と異なり、40才台であった。これは農協職員検診受診者の増加によるものと思われる。農協別では、入善町農協が1,951人で、前年度より147名、8.2%とかなり増加して、全体の36.7%を占め、ついで黒部(10.5%)、滑川市(9.7%)、富山市中央(7.2%)、婦中町(6.0%)、上市町(4.4%)、魚津市(4.0%)、富山市(3.5%)の順になっている。このうち黒部、婦中町、上市町の各農協が増加し、富山市農協が減少した。

表2 年代別・性別総合判定

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	8	4	25	35	45	84	24	51	23	17	1	1	126	5.2%	192	6.7%	318	6.0%
差し支えなし	3	3	25	20	40	86	34	68	45	32	6	3	153	6.3%	212	7.3%	365	6.9%
要再検		2	4	2	5	9	7	9	6	7	2		24	1.0%	29	1.0%	53	1.0%
要経過観察	20	4	118	73	310	320	229	380	203	273	35	19	915	37.7%	1069	37.0%	1984	37.4%
要精密	14	7	76	76	210	246	179	219	187	183	40	19	706	29.1%	750	26.0%	1456	27.4%
要治療	1	1	4	14	33	76	32	51	20	21	4		94	3.9%	163	5.6%	257	4.8%
治療中		1	19	8	77	66	126	169	154	204	30	23	406	16.7%	471	16.3%	877	16.5%
合 計	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2424		2886		5310	
有所見者数	35	15	221	173	635	717	573	828	570	688	111	61	2145	88.5%	2482	86.0%	4627	87.1%
%	76.1%	68.2%	81.5%	75.9%	88.2%	80.8%	90.8%	87.4%	89.3%	93.4%	94.1%	93.8%						
合計 %	50	73.5%	394	79.0%	1352	84.1%	1401	88.8%	1258	91.5%	172	94.0%						

表3 呼吸器

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	43	22	252	219	682	867	550	891	502	675	83	58	2112	87.2%	2732	94.8%	4844	91.3%
差し支えなし			1	1	6	3	14	17	27	20	8	3	56	2.3%	44	1.5%	100	1.9%
要再検			7	2	8	5	10	5	11	5			36	1.5%	17	0.6%	53	1.0%
要経過観察	3		8	2	17	9	47	30	79	28	25	3	179	7.4%	72	2.5%	251	4.7%
要精密			3	2	3	2	5	2	9	3	2		22	0.9%	9	0.3%	31	0.6%
要治療									1				1	0.0%	0	0.0%	1	0.0%
治療中				1	4	0	5	1	8	6		1	17	0.7%	9	0.3%	26	0.5%
合 計	46	22	271	227	720	886	631	946	637	737	118	65	2423		2883		5306	
有所見者数	3	0	18	7	32	16	67	38	108	42	27	4	255	10.5%	107	3.7%	362	6.8%
%	6.5%	0.0%	6.6%	3.1%	4.4%	1.8%	10.6%	4.0%	17.0%	5.7%	22.9%	6.2%						
合計 %	3	4.4%	25	5.0%	48	3.0%	105	6.7%	150	10.9%	31	16.9%						

## (2) 総合判定

表2に年代別性別総合判定結果を示す。異常なし、差し支えなしと判定したものは男11.5%、女14.0%、平均12.9%となり、ほぼ前年度並みであった。検診項目や判定者、判定基準もほぼ同じなので、このような結果になったと考えられる。年代別にみると、高齢になるほど有所見者が多いのは当然であるが、若年者程男性が、高齢になる程女性に異常が多い傾向がみられている。

## (3) 呼吸器

表3に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男10.5%、女3.7%、

平均6.8%にみられ、前年度と比べると男女共かなり減少した。これは継続受診者における軽微な有所見者を、かなり“差し支えなし”の判定に入れたため、内容的には殆ど差はないとみて差し支えない。この中で、呼吸器異常の大部分を占める胸部X線写真の異常内容のそれぞれについてみると、①肺異常陰影（主に肺野の限局性陰影を呈するもの）としたものは70名（男47、女23）、1.3%で、前年度よりかなり減少した。このうち要精査は19名（男14、女5）で、この中から男女各1名計2名の肺癌（いずれも腺癌）が発見された。なお両名共喫煙せず、喀痰細胞診にも異常はみられていない。その他は陳旧性炎症1名、肺

外のもの1名、異常なし12名、受診せず3名となっている。要精査以外の肺異常陰影は、前年度との比較読影などを参考にし、経過観察または要再検などとした。②肺門影増大(いわゆる肺門部陰影の腫大がみられるもの)としたものは48名(男31,女17)で、前年度より大幅に減少した。このうち要精査は6名(男4,女2)で、この中から男性2名の肺癌が発見された。この2名共一見して明らかな肺門部の腫瘤状陰影を呈しているが、このうち1年前に受診している1名については1年前のX-Pでは異常を指摘できなかった。また2名共喫煙者であり、小細胞癌で、喀痰細胞診では1名はclassV,1名は異常なしであった。その他は、気管支拡張症1名、異常なし3名であった。③肺紋理増強(肺血管陰影の増強、太まりがみられるもの)としたものは41名(男32,女9)で、これも前年度より大幅に減少した。このうち要精査は2名(男)で、その結果は異常なし1名、受診せず1名となっている。

以上肺異常陰影、肺門影増大、肺紋理増強の三者を合計すると159名(男110,女49)で、前年度の約半分であった。このうち要精査は27名(男20,女7)で、この中から肺野型2名、肺門型2名、計4名の肺癌が発見された。

その他の呼吸器異常では換気機能異常が最

も多く、その他塵肺症、肺気腫、陳旧性肺結核などが若干みられたのは例年通りであった。

一方喀痰細胞診は、実施者298名(男277,女21)中、回収された検体は241名(男224,女17)で、回収率80.9%であり、前年度よりやや減少した。その成績はE判定<sup>2)</sup>1(前述の肺癌例)、C判定<sup>2)</sup>(要再検)2、A判定<sup>2)</sup>(材料不適)18以外はすべてB判定<sup>2)</sup>(異常なし)であった。とにかく喀痰細胞診受診者が年々減少しているのは残念である。

#### (4) 循環器

表4に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は25.6%で、前年度と殆ど同じく、男女差もみられなかった。異常者の内訳をみると、まず高血圧(疑も含む)は表5に示す通り、男18.0%、女15.6%、平均16.7%にみられ、このうち一過性の高血圧と思われる要再検者を除くと14.8%となり、いずれもほぼ前年度並みであった。この高血圧のうち治療中の者は53.4%(男51.3%、女55.6%)で、前年度よりやや増加している。これを年代別にみると、39才以下3.0%(男3.5%、女2.4%)、40才台8.5%(男10.8%、女6.7%)、50才台20.0%(男23.3%、女17.8%)、60才台26.0%(男26.2%、女25.8%)、70才以上32.2%(男28.8%、女38.5%)となり、前年度と

表4 循環器

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	41	20	225	206	522	736	352	624	311	394	52	23	1503	62.0%	2003	69.4%	3506	66.0%
差し支えなし	3	2	26	9	89	35	76	49	93	46	11	6	298	12.3%	147	5.1%	445	8.4%
要再検			1	1	7	13	13	16	11	15	2		34	1.4%	45	1.6%	79	1.5%
要経過観察	1		11	18	64	68	98	148	98	142	26	16	298	12.3%	382	13.2%	680	12.8%
要精密	1		2	1	4	4	12	5	9	7	5	2	33	1.4%	19	0.7%	52	1.0%
要治療			1	1	1	2	2		3	2			8	0.3%	5	0.2%	13	0.2%
治療中			5	2	32	29	78	105	113	131	22	18	250	10.3%	285	9.9%	535	10.1%
合計	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2424		2886		5310	
有所見者数	2	0	20	13	109	116	203	274	234	297	55	36	623	25.7%	736	25.5%	1359	25.6%
%	4.3%	0.0%	7.4%	5.7%	15.1%	13.1%	32.2%	28.9%	36.7%	40.3%	46.6%	55.4%						
合計%	2	2.9%	33	6.6%	225	14.0%	477	30.2%	531	38.6%	91	49.7%						

表5 高血圧

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要再検査			2	1	7	14	16	20	13	21	3	1	41	1.7%	57	2.0%	98	1.8%
要経過観察			6	2	44	24	62	66	63	67	11	11	186	7.7%	170	5.9%	356	6.7%
要精密検査	1												1	0.0%	0	0.0%	1	0.0%
要治療				1	2	1	2		2	2			6	0.2%	4	0.1%	10	0.2%
治療中			2	2	25	20	67	83	89	100	20	13	203	8.4%	218	7.6%	421	7.9%
計	1	0	10	6	78	59	147	169	167	190	34	25	437	18.0%	449	15.6%	886	16.7%
%	2.2%	0.0%	3.7%	2.6%	10.8%	6.7%	23.3%	17.8%	26.2%	25.8%	28.8%	38.5%						
合計%	1	1.5%	16	3.2%	137	8.5%	316	20.0%	357	26.0%	59	32.2%						

表6 高血圧以外の循環器異常

内訳 判定	心肥大 心負荷		虚血性心疾患		心房細動		期外収縮		右脚ブロック		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	156	39					33	43	73	39	81	64
要再検査	157	116	35	160	5	1	11	9	7	6	43	80
要経過観察	14	6	4	4	11	1	2	2			13	8
要精密検査	1				1						1	
要治療												
治療中	6	6	25	32	4	3	1	2	2		28	32
計	334	167	64	196	21	5	47	56	82	45	166	184
%	13.8%	5.8%	2.6%	6.8%	0.9%	0.2%	1.9%	1.9%	3.4%	1.6%	6.8%	6.4%
合計%	501	9.4%	260	4.9%	26	0.5%	103	1.9%	127	2.4%	350	6.6%

比べると、40才台及び50才台の女性でやや減少したものの、全体の傾向は余り変わっていない。

高血圧以外の循環器異常は、大部分心電図所見から得られたもので、表6に示す。高血圧と関連の深い心肥大、心負荷は男13.8%、女5.8%、平均9.4%で、前年度より男女共やや増加し、虚血性心疾患(疑)は男2.6%、女6.8%、平均4.9%と前年度よりやや減少した。但し、これには偽陽性もかなり含まれていると考えられる。その他では、上室性並びに心室性期外収縮1.9%、完全並びに不完全右脚ブロック2.4%、心房細動0.5%、その他6.6%などがみられ、ほぼ例年通りであった。

#### (5) 上部消化管

表7は、透視を受けた5,218人(98.3%)についての成績を示したものである。異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男31.7%、女18.3%、平均24.4%であり、その中で要精査とした者は、男16.3%、女10.3%、平均13.0%で、前年度よりかなり減少した。これは、継続受診者における有所見者について、過去の精検受診歴やその成績等を勘案して、単に経過観察とした者が少なくなかったからである。異常所見を部位別にみると、食道0.6%、胃18.9%、十二指腸3.0%となり、前年度より胃でやや減少した。精検受診者は男76.4%(前年度71.3%)、女85.9%(前年度87.0%)、平均80.5%(前年度78.2%)で、前年度と比べると男性で増加、女性でやや減少、全体として僅かながら増加した。その結果は表8に示

表7 上部消化管

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	33	16	218	208	496	726	415	771	388	535	64	40	1614	67.9%	2296	80.8%	3910	74.9%
差支えなし						7	1	5	7	12	3	1	11	0.5%	25	0.9%	36	0.7%
要再検査									1				1	0.0%	0	0.0%	1	0.0%
要経過観察	3	1	18	6	86	54	86	62	98	68	18	6	309	13.0%	197	6.9%	506	9.7%
要精密検査	3		26	10	112	79	107	91	117	99	22	13	387	16.3%	292	10.3%	679	13.0%
要治療	1				7		2	3	1		1		12	0.5%	3	0.1%	15	0.3%
治療中			5		9	8	10	6	16	11	4	2	44	1.9%	27	1.0%	71	1.4%
合 計	40	17	267	224	710	874	621	938	628	725	112	62	2379		2840		5218	
有所見者数	7	1	49	16	214	141	205	162	233	178	45	21	753	31.7%	194	18.3%	1272	24.4%
%	17.5%	5.9%	18.4%	7.1%	30.1%	16.1%	33.0%	17.3%	37.1%	24.6%	40.2%	33.9%						
合計%	8	14.0%	65	13.2%	355	22.4%	367	23.5%	411	30.4%	66	37.9%						

表8 上部消化管精検結果

	受診者数	要精検者数	精検受診者	精検受診率(%)	2次検診結果内訳(所見数)													
					胃癌	ATP	胃粘膜下腫瘍	胃潰瘍	胃潰瘍癒痕	胃ポリープ	12指腸潰瘍	12指腸潰瘍癒痕	12指腸ポリープ	胃炎	その他	異常なし		
～29才	男	40	4	1	25.0%			1										
	女	17			エラー													
30～39才	男	267	26	15	57.7%								1					
	女	224	10	9	90.0%						1							8
40～49才	男	710	119	84	70.6%				14	7	2		2	1	34			25
	女	874	80	64	80.0%	2		3			8		1		19	2		29
50～59才	男	621	109	87	79.8%	1			9	9	7	1		1	34	2		25
	女	983	94	79	84.0%	1		1	6	5	14				25	3		25
60～69才	男	628	118	96	81.4%	1	1	2	6	7	8				38	8		28
	女	725	100	90	90.0%	1		3	2	4	19	1			26	2		33
70才～	男	112	23	22	95.7%	1		2	2	2	2				5	2		8
	女	62	14	14	100.0%				1	3	1				3	1		6
計	男	2378	399	305	76.4%	3	1	5	31	25	19	1	3	2	111	12		86
	女	2885	298	256	85.9%	4	0	7	9	12	43	1	1	0	73	8		101
合計		5263	697	561	80.5%	7	1	12	40	37	62	2	4	2	184	20		187

す通りである。

発見胃癌は男3名、女4名、計7名で、受診者に対する比率は0.13%と例年の0.3%前後に比べると半分以下と少なかった。その原因は不明で、今のところ偶然と考えているが、次年度以降の発見状況によって評価できると思われる。進行度別では、早期癌4名、進行癌3名であった。

その他では、胃潰瘍(癒痕)77名(1.5%)、十二指腸潰瘍(癒痕)6名(0.1%)、胃ポリープ62名(1.2%)、胃粘膜下腫瘍12名(0.2%)などがみられた。

(6) 糞便潜血反応

ほぼ前年度並みの5,005名(94.3%)が受検した。同様に当日持参の3日間の便について

実施したが、検査方法は、イムディア Sp 法から OC ヘムディア・オート法に変更した (cut off 値=100ng)。成績を述べると、3 回のうち 1 回受検者は 207 名 (4.1%) で、そのうち陽性者は 10 名、4.8%、2 回受検者は 522 名 (10.4%) で、そのうち 1 回陽性者は 37 名、7.1%、2 回陽性者は 6 名、1.2%、3 回受検者は 4,276 名 (85.4%) で、そのうち 1 回陽性 257 名、6.0%、2 回陽性 69 名、1.6%、3 回共陽性 22 名、0.5% であった。以上受検回数にかかわらず 1 回でも陽性を示した者は、男 9.1%、女 7.1%、平均 8.0% となり、前年度よりやや減少した。

1 回でも陽性を示した者に対しては、ここ 2 年以内に精査を受けている場合を除いてすべて要精査とした。その結果要精査は、受検者に対して男 8.3%、女 6.3%、平均 7.2% となり、便潜血陽性者の 90.0% に当たる。このうち精検受診者は男 63.8%、女 67.4%、平均 65.9% で、前年度と比べて男性で増加、女性で減少した。この中から、男女各 2 名、計 4 名の大腸癌が発見された。この 4 名はいずれも 3 回検便を受けているが、3 回共陽性 1 名、2 回陽性 1 名、1 回だけ陽性 2 名となっている。この成績から大腸癌発見率をみると、受診者の 0.08%、便潜血陽性者の 1.0%、精検受診者の 1.7% に当り、便潜血陽性回数との関係のみ

ると、3 回陽性者の 4.6%、2 回陽性者の 1.3%、1 回陽性者の 0.7% に癌が発見されたことになり、前年度と同じく、便潜血陽性回数が多い程癌の確立が高くなっている。

### (7) 肝 臓

前年度と同じく、肝機能検査と超音波による形態診断とによって判定した。その成績は表 9 に示す通りで、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男 38.2%、女 18.4%、平均 27.4% にみられ、前年度より主に男性でやや増加した。その内訳を表 10 に示す。アルコール性肝障害と思われるものは 1 名を除いてすべて男性で、男性の 12.5% にみられており、前年度よりやや減少したが、脂肪肝と判定された者の中にアルコール性のものがかかり含まれるので、前年度と比べて大差はないと思われる。その他の肝障害は 10.8% と前年度よりかなり増加したが、この中には様々な肝機能異常が含まれているものの軽度の異常値を示すものが多く、余り問題とならないものが多いと思われる。

一方超音波によって、肝嚢胞 7.2%、肝血管腫または肝腫瘍疑 2.3%、脂肪肝 6.3% などがほぼ前年度並みにチェックされたが、この中で肝腫瘍疑とした中から、肝硬変に合併した男性の肝細胞癌 1 名が発見された。

表 9 肝 臓

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	36	17	160	181	390	696	343	650	365	488	78	37	1372	56.6%	2069	71.7%	3441	64.8%
差し支えなし			5	16	16	73	44	97	47	89	13	12	125	5.2%	287	9.9%	412	7.8%
要再検			9	6	16	7	14	29	30	27	6	4	75	3.1%	73	2.5%	148	2.8%
要経過観察	6	2	83	16	249	75	195	135	151	111	20	11	704	29.0%	350	12.1%	1054	19.8%
要精密	4	2	12	8	36	33	25	31	32	13	1	1	110	4.5%	88	3.0%	198	3.7%
要治療					2	1	5		4	4			11	0.5%	5	0.2%	16	0.3%
治療中		1	2	1	11	2	5	5	9	5			27	1.1%	14	0.5%	41	0.8%
合計 %	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2424		2886		5310	
有所見者数	10	5	106	31	314	118	244	200	226	160	27	16	927	38.2%	530	18.4%	1457	27.4%
%	21.7%	22.7%	39.1%	13.6%	43.6%	13.3%	38.7%	21.1%	35.4%	21.7%	22.9%	24.6%						
合計 %	15	22.1%	137	27.5%	432	26.9%	444	28.1%	386	28.1%	43	23.5%						

表10 肝臓の異常

内 訳 判定	アルコール性 肝 障 害		そ の 他 の 肝 障 害		HBs 抗原 陽 性		肝 血 管 腫 瘍		肝 の う 胞		脂 肪 肝		肝 内 結 石	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし			23	112					148	226				
要 再 検			81	79	1				1	1				
要経過観察	302	1	70	85	42	42	20	20		4	256	193	22	17
要 精 密	1		51	29	22	12	36	44						
要 治 療	1		8	3		2					2			
治 療 中			19	12	3	1	1				1	1		
計	304	1	252	320	68	57	57	64	149	231	259	194	22	17
%	12.5%	0.0%	10.4%	11.1%	2.8%	2.0%	2.4%	2.2%	6.1%	8.0%	10.7%	6.7%	0.9%	0.6%
合 計 %	305	5.7%	572	10.8%	125	2.4%	121	2.3%	380	7.2%	453	8.5%	39	0.7%

表11 胆嚢・膵臓の異常

内 訳 判定	胆 石		胆 の う 炎		胆 の う ポ リ ー プ		胆 の う 腫 瘍		膵 炎		膵 腫 瘍	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし									1			
要 再 検									1	5		
要経過観察	26	36	12	6	100	108			30	35		
要 精 密	27	23	1		83	51	2	1	129	139	5	6
要 治 療		1										
治 療 中	2	5					2		4	1		
計	55	65	13	6	183	159	4	1	165	180	5	6
%	2.3%	2.3%	0.5%	0.2%	7.6%	5.5%	0.2%	0.0%	6.8%	6.2%	0.2%	0.2%
合 計 %	120	2.3%	19	0.4%	342	6.4%	5	0.1%	345	6.5%	11	0.2%

HBs 抗原陽性者は2.4%とほぼ前年度と同じであった。

#### (8) 胆 嚢

超音波による胆嚢の所見を表11に示す。胆石は男女共2.3%、胆嚢ポリープは男7.6%、女5.5%、平均6.4%で、ほぼ前年度並みであった。超音波でチェックされた胆石や胆嚢ポリープは、過去に専門医による確認が行われている場合はそのまま経過観察とし、然らざる場合や初めての場合は要精検としている。なお胆嚢癌は発見されなかった。

#### (9) 膵 臓

血清及び尿アミラーゼ測定と超音波検査とによってチェックしている。その結果は表11

に示した通りである。膵炎疑としたのは、血清アミラーゼ131単位以上(3.0%)または尿アミラーゼ701単位以上(3.3%)を示したものの、あるいは701単位以上(3.3%)を示したものの、あるいは超音波で high echo levelなどを呈したものである。このうちアミラーゼ値は偽陽性が多いことを考慮して、正常レベルを前年度よりやや上げて、血清アミラーゼを130単位以下、尿アミラーゼを700単位以下とし、それを超えた者のうち、過去に精査を受けていない者に対して要精査とした。

膵腫瘍疑としたのは超音波による所見である。但し、超音波による膵のチェックは不十分なことが多いので参考程度としている。結局、膵癌は発見されなかったが、超音波で膵管拡張の所見を呈した男性で、アミラーゼ値

表12 腎・泌尿器

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	46	17	251	193	647	731	529	796	481	593	82	57	2036	83.9%	2387	82.7%	4423	83.2%
差支えなし		4	10	31	36	116	55	94	119	92	29	7	249	10.3%	344	11.9%	593	11.2%
要再検			1		2	2	5	1	2	1	1		11	0.5%	4	0.1%	15	0.3%
要経過観察	3	1	7	4	27	31	29	41	28	40	6	1	100	4.1%	118	4.1%	218	4.1%
要精密			1		7	2	9	5	7	8			24	1.0%	15	0.5%	39	0.7%
要治療													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
治療中			1		1	5	4	10	1	3			7	0.3%	18	0.6%	25	0.5%
合計	49	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2427		2886		5313	
有所見者数	3	1	10	4	37	40	47	57	38	52	7	1	142	5.9%	155	5.4%	297	5.6%
%	6.1%	4.5%	3.7%	1.8%	5.1%	4.5%	7.4%	6.0%	6.0%	7.1%	5.9%	1.5%						
合計%	4	5.6%	14	2.8%	77	4.8%	104	6.6%	90	6.5%	8	4.4%						

表13 腎・泌尿器異常

内訳 判定	蛋白尿		血 尿		尿路結石 腎結石		腎のう胞		腎腫瘍		腎・泌尿器 その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	2		8	204			260	161				
要再検	1		10	4								
要経過観察	26	14	44	44	32	26					6	37
要精密	3	2					5	2	13	8	1	4
要治療												
治療中	1	3	1	2	2	6					3	10
計	33	19	63	254	34	32	265	163	13	8	10	51
%	1.4%	0.7%	2.6%	8.8%	1.4%	1.1%	10.9%	5.6%	0.5%	0.3%	0.4%	1.8%
合計%	52	1.0%	317	6.0%	66	1.2%	428	8.1%	21	0.4%	61	1.1%

は正常であったが精検の結果、嚢胞性腫瘍が認められるものの癌を否定できず、手術によって脾嚢胞腺腫と確認された1例がみられた。

#### (10) 腎・泌尿器

検尿、腎機能及び超音波検査によって判定した。その結果を表12に示す。異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男5.9%、女5.4%、平均5.6%とほぼ前年度並みであった。異常の内訳は表13に示す通りである。蛋白尿は1.0%(男1.4%、女0.7%)、血尿は6.0%(男2.6%、女8.8%)で、いずれも前年度よりやや減少した。

一方超音波によって、尿路結石1.2%、腎嚢胞8.1%、腎腫瘍(疑)0.4%などがチェック

されたが、このうち腎腫瘍疑とした中から女性の腎癌が1名発見された。なおこの腎癌は検尿では異常はみられていない。

その他の異常では、女性では大部分尿路感染(疑)であり、その他腎機能障害等が少数みられている。

#### (11) 血 液

表14に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男3.6%、女9.7%、平均6.9%で、ほぼ前年度と変わらなかった。異常の大部分は女性の貧血(Hb 12.0g/dl以下)で、女性の9.0%にみられており、前年度よりやや増加した。これを年代別にみると、例年通り49才以下14.9%、50才以上5.2%と若年者



表14 血 液

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	43	21	242	190	624	718	556	874	575	683	98	62	2138	88.2%	2548	88.3%	4686	88.2%
差支えなし	2		26	6	72	25	55	15	34	13	10		199	8.2%	59	2.0%	258	4.9%
要再検					4	1	3	3	5	1			12	0.5%	5	0.2%	17	0.3%
要経過観察	1		2	25	15	101	13	46	21	36	9	3	61	2.5%	211	7.3%	272	5.1%
要精密						2		1	3	1			3	0.1%	4	0.1%	7	0.1%
要治療		1		6	2	35	2	6		1	1		5	0.2%	49	1.7%	54	1.0%
治療中			1	1	3	5	2	2		2			6	0.2%	10	0.3%	16	0.3%
合 計	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2424		2886		5310	
有所見者数	1	1	3	32	24	144	20	58	29	41	10	3	87	3.6%	279	9.7%	366	6.9%
%	2.2%	4.5%	1.1%	14.0%	3.3%	16.2%	3.2%	6.1%	4.5%	5.6%	8.5%	4.6%						
合 計 %	2	2.9%	35	7.0%	168	10.5%	78	4.9%	70	5.1%	13	7.1%						

表15 糖・代謝

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	35	21	208	219	547	827	461	844	496	644	98	59	1845	76.1%	2613	90.5%	4458	84.0%
差支えなし				2	1	6	2	10	3	7	2	1	8	0.3%	26	0.9%	34	0.6%
要再検	1		7	1	17	17	24	36	28	34	4	2	81	3.3%	90	3.1%	171	3.2%
要経過観察	9	1	51	5	105	22	76	28	61	27	8	2	310	12.8%	85	2.9%	395	7.4%
要精密	1		2	2	13	12	17	11	14	10			47	1.9%	35	1.2%	82	1.5%
要治療			1		18	2	24	5	13	2	2		58	2.4%	9	0.3%	67	1.3%
治療中			2		19	1	27	13	23	13	4	1	75	3.1%	28	1.0%	103	1.9%
合 計	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	118	65	2424		2886		5310	
有所見者数	11	1	63	8	172	54	168	93	139	86	18	5	571	23.6%	247	8.6%	818	15.4%
%	23.9%	4.5%	23.2%	3.5%	23.9%	6.1%	26.6%	9.8%	21.8%	11.7%	15.3%	7.7%						
合 計 %	12	17.6%	71	14.2%	226	14.1%	261	16.5%	225	16.4%	23	12.6%						

が大きく上回っている。

その他では、白血球増加(9000/mm<sup>3</sup>以上)5.0%、白血球減少(3000/mm<sup>3</sup>以下)0.4%、血小板減少(13×10<sup>4</sup>/mm<sup>3</sup>未満)0.3%などがみられた。

### (12) 甲 状 腺

医師の触診によって甲状腺腫大とされたものは、男2.7%、女16.7%にみられ、ほぼ前年度と同じであった。その中で要精密としたものは男0.4%、女2.5%、平均1.5%と前年度よりかなり増加した。この中から女性の甲状腺癌が1名発見された。このように、甲状腺腫大は特に女性においてかなり頻度の高いもの

であり、この中に潜在性の甲状腺癌の存在も決して少なくないと思われる。その発見のための簡単で且つ信頼性のある手段として、超音波検査が有用と考えられるので、今後導入を考えていきたい。

### (13) 糖・代謝

表15に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男23.6%、女8.6%、平均15.4%で、男女差が大きく、前年度と比べると特に男性においてかなり増加した。その内訳は表16に示す通りである。空腹時血糖 110mg/dl 以上の者(110mg/dl 以下でも糖尿病で治療中の者を含む)は、男12.8%、女6.7

表16 糖・代謝異常

内 訳 判 定	糖 尿 病		高 血 圧		耐糖能異常		高尿酸血症		高 r-gl 血症		そ の 他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし			1	1					3	24	6	1
要 再 検			95	91			1					1
要経過観察	22	11	38	25	7	3	255	11	4	36	2	1
要 精 密	42	24	6	7					1	3		
要 治 療	44	9					12					
治 療 中	54	23				1	18		1	1	1	
計	162	67	140	124	7	4	286	11	9	64	9	3
%	6.7%	2.3%	5.8%	4.3%	0.3%	0.1%	11.8%	0.4%	0.4%	2.2%	0.4%	0.1%
合 計 %	229	4.3%	264	5.0%	11	0.2%	297	5.6%	73	1.4%	12	0.2%

表17 血清脂質

年代性別 判 定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	31	19	152	186	372	598	362	429	401	288	82	32	1400	57.8%	1552	53.8%	2952	55.6%
差支えなし	1	1	1	6	8	32	5	36	11	27	1	2	27	1.1%	104	3.6%	131	2.5%
要 再 検										1			0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要経過観察	14	2	113	36	326	353	257	438	218	372	32	27	960	39.6%	1128	39.1%	2088	39.3%
要 精 密								1					0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要 治 療			3		8	2	2	21	2	12			15	0.6%	35	1.2%	50	0.9%
治 療 中			2		6	2	5	22	6	37	3	4	22	0.9%	65	2.3%	87	1.6%
合 計	46	22	271	228	720	887	631	947	638	737	18	65	2424		2886		53310	
有所見者数	14	2	118	36	340	257	264	482	226	422	35	31	997	41.1%	1230	42.6%	2227	41.9%
%	30.4%	9.1%	43.5%	15.8%	47.2%	29.0%	41.8%	50.9%	35.4%	57.3%	29.7%	47.7%						
合 計 %	16	23.5%	154	30.9%	597	37.1%	746	47.3%	648	47.1%	66	36.1%						

%, 平均9.5%にみられ, 男女共前年度より増加した。

一方高尿酸血症 (7.0mg/dl以上) は殆ど男性で, 男性の11.8%にみられ, 前年度よりかなり増加した。これは, 前々年度までは年々減少傾向にあったところ, 一転して前年度から著しく増加に転じ, 今年度もさらに増加しており, 対策を急がなければならない。

#### (14) 血清脂質

表17に血清脂質の成績を示す。総コレステロール, 中性脂肪及び HDL コレステロールのいずれかが異常を示した者は, 男42.2%, 女46.2%, 平均44.4%で, 男女共前年度より増加したが, 特に女性において増加が著しか

った。これを年代別にみると, 男性では39才以下42.3%, 40才台48.3%, 50才台42.6%, 60才以上36.1%と, 40才台をピークにはほぼ全年代に平均してみられるのに対し, 女性では39才以下18.0%, 40才台32.6%, 50才台54.7%, 60才以上60.8%と, 50才以降急激に増加しているのが特徴で, これは後述するように, 男性に多い高中性脂肪血症と高年女性に多い高コレステロール血症に対応した成績である。これを各脂質別にみると, コレステロールのみ高値は表18に示すように, 男11.0%, 女24.9%, 平均18.6%で, 男女共前年度より増加したが, 特に女性で著しく増加した。これを年代別にみると, 男性ではどの年代にも平均してみられるのに対し, 女性では50才以降急増

表18 高コレステロール血症単独

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし					1					1			1	0.0%	1	0.0%	2	0.0%
要再検査										1			0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要経過観察	2	1	22	14	74	128	70	281	73	226	17	16	258	10.6%	666	23.1%	924	17.4%
要精密検査							1						0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要治療			1			1		12		5			1	0.0%	18	0.6%	19	0.4%
治療中						1	3	13	1	16	2	3	6	0.2%	33	1.1%	39	0.7%
計	2	1	23	14	75	130	73	307	74	249	19	19	266	11.0%	720	24.9%	986	18.6%
%	4.3%	4.5%	8.5%	6.1%	10.4%	14.7%	11.6%	32.4%	11.6%	33.8%	16.1%	29.2%						
合計%	3	4.4%	37	7.4%	205	12.8%	380	24.1%	323	23.5%	38	20.8%						

表19 高中性脂肪血症単独

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	2		1		7	5	5	8	12	4	1		28	1.2%	17	0.6%	45	0.8%
要再検査													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	7		53	7	140	39	107	44	82	45	6	3	395	16.3%	138	4.8%	533	10.0%
要精密検査													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要治療					3		2		1				6	0.2%	0	0.0%	6	0.1%
治療中			1		1		2		3				2	0.1%	5	0.2%	7	0.1%
計	9	0	55	7	151	44	114	54	95	52	7	3	431	17.8%	160	5.5%	591	11.1%
%	19.6%	0.0%	20.3%	3.1%	21.0%	5.0%	18.1%	5.7%	14.9%	7.1%	5.9%	4.6%						
合計%	9	13.2%	62	12.4%	195	12.1%	168	10.6%	147	10.7%	10	5.5%						

表20 高コレステロール血症+高中性脂肪血症

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要再検査													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	2	1	25	5	81	28	54	68	40	63	2	4	204	8.4%	169	5.9%	373	7.0%
要精密検査													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要治療					5	1		10	1	7			8	0.3%	18	0.6%	26	0.5%
治療中			1		5	1	2	7	5	16	1	1	14	0.6%	25	0.9%	39	0.7%
計	2	1	28	5	91	30	56	85	46	86	3	5	226	9.3%	212	7.3%	438	8.2%
%	4.3%	4.5%	10.3%	2.2%	12.6%	3.4%	8.9%	9.0%	7.2%	11.7%	2.5%	7.7%						
合計%	3	4.4%	33	6.6%	121	7.5%	141	8.9%	132	9.6%	8	4.4%						

している。

次に中性脂肪のみ高値は表19に示すように、男17.8%、女5.5%、平均11.1%にみられ、前年度と殆ど同じであった。これを年代別にみると、男性では49才以下に多く、50才以降は高齢になるに従って減少するのに対し、女性

では高齢になる程多くなる傾向がみられている。

両者共高値は表20に示すように、男9.3%、女7.3%、平均8.2%と男女差は少ないが、男女共前年度よりやや増加した。結局、高コレステロール血症は男20.3%、女32.3%、平均

表21 低 HDL コレステロール血症

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし		1		5	1	38		42		36		1	1	0.0%	123	4.3%	124	2.3%
要 再 検													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	3	1	26	16	88	94	74	128	50	123	12	7	253	10.4%	369	12.8%	622	11.7%
要 精 密													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 治 療													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
治 療 中													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	3	2	26	21	89	132	74	170	50	159	12	8	254	10.5%	492	17.0%	746	14.0%
%	6.5%	9.1%	9.6%	9.2%	12.4%	14.9%	11.7%	18.0%	7.8%	21.6%	10.2%	12.3%						
合 計 %	5	7.4%	47	9.4%	221	13.8%	244	15.5%	209	15.2%	20	10.9%						

表22 年代別肥満度

年代性別 標準体重比	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
31%以上	1	1	7	7	12	26	7	21	4	17	1		32	1.3%	72	2.5%	104	2.0%
21～30%	1		15	17	41	45	35	48	15	42	3	1	110	4.5%	153	5.4%	263	5.0%
11～20%	5		52	28	132	129	119	179	93	130	10	9	411	17.0%	475	16.6%	886	16.8%
-10～+10%	31	11	153	128	439	553	388	593	393	431	69	10	1473	60.8%	1726	60.4%	3199	60.6%
-11～-20%	6	6	33	46	83	118	74	93	107	98	27	14	330	13.6%	375	13.1%	705	13.3%
-21%以下	2	4	11	2	13	16	8	13	26	19	8	2	68	2.8%	56	2.0%	123	2.3%

26.8%、高中性脂肪血症は男27.1%、女12.9%、平均19.4%となり、これを前年度と比べると、高コレステロール血症は男女共に女性で著しく増加し、高中性脂肪血症は男女共に僅かに増加した。

一方、低HDLコレステロール血症は表21に示すように、男10.5%、女17.0%、平均14.0%にみられ、男性でやや減少、女性でやや増加した。

#### (15) 肥 満

前年度と同じく、明治生命の標準体重表<sup>3)</sup>を用いてその比率で肥満度を表わしたのが表22である。標準体重比+11%以上の肥満者は男22.8%、女24.3%、平均23.6%にみられた。これを年代別にみると、男性では30才台をピークに40才～50才台に多く、60才以降は著しく減少しているのに対し、女性では50才台をピークにほぼどの年代にも平均してみられる

が、29才以下と70才以降は著しく少なくなっている。以上の肥満の傾向は、前年度と比べて殆ど同じであった。

なお標準体重比-11%以下の“やせ”は、男16.4%、女14.9%、平均15.6%にみられ、これも前年度と比べて殆ど変わらなかった。

#### (16) 眼 底

表23に示すように、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男15.5%、女11.8%、平均13.5%で、前年度より特に男性においてやや減少した。ただし判定医は同じである。主なものは例年通り、乳頭陥凹、網脈絡膜萎縮・変性・白斑、高血圧性変化、動脈硬化性変化などである。

#### (17) 乳 腺

従来通り、外科医による触診と超音波断層撮影との併用で実施した。その結果は表24に

表23 眼 底

年代性別 判定	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	20	22	225	196	578	774	451	688	378	442	53	27	1726	72.7%	2149	76.7%	3875	74.9%
差支えなし	5		14	15	53	43	72	128	115	127	22	10	281	11.8%	323	11.5%	604	11.7%
要再検査													0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	1		23	12	68	58	84	90	99	88	23	14	298	12.6%	262	9.3%	560	10.8%
要精密			6	4	11	5	8	15	11	14	3	1	39	1.6%	39	1.4%	78	1.5%
要治療					1		3	1	6	1	1		11	0.5%	2	0.1%	13	0.3%
治療中			2		4		3	7	10	20		1	19	0.8%	28	1.0%	74	0.9%
合 計	46	22	270	227	715	880	621	929	620	692	102	53	2374		2803		5177	
有所見者数	1	0	31	16	84	63	98	123	126	123	27	16	367	15.5%	331	11.8%	698	13.5%
%	2.2%	0.0%	11.5%	7.0%	11.7%	7.2%	15.8%	12.2%	20.3%	17.8%	26.5%	30.2%						
合計%	1	1.5%	47	9.5%	147	9.2%	211	13.6%	249	19.0%	43	27.7%						

表24 乳 房

年代別 判定	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし	20	204	754	882	711	61	2632	91.2%
差支えなし							0	0.0%
要再検査			12	7	3		22	0.8%
要経過観察	2	15	90	36	16	4	163	5.6%
要精密		9	31	22	7		69	2.4%
要治療							0	0.0%
治療中							0	0.0%
合 計	22	228	887	947	737	65	2886	
有所見者数	2	24	133	65	26	4	254	
%	9.1%	10.5%	15.0%	6.9%	3.5%	6.2%	8.8%	

示す通りである。8.8%に異常がみられ、前年度よりやや増加した。その内訳は、乳腺症(疑)6.4%、良性乳腺腫瘍(疑)1.9%、リンパ節腫脹0.6%で、良性乳腺腫瘍疑とした中から乳癌が1名発見された。なおこの患者は子宮癌も合併していた。

#### (18) 婦 人 科

前年度に引き続き、経膈卵巣エコーを加えて実施した。2,749名(95.3%)が受検し、その結果を表25に示す。9.4%に異常がみられたが前年度よりかなり減少した。ただし担当医は同じである。異常の内訳は表26に示す通りで、膈炎2.8%、子宮筋腫3.1%、卵巣腫瘍

1.8%などのほか、子宮頸・膈部細胞診 class III以上が12名みられ、この中で class V 2名、class IIIb 1名であった計3名に子宮癌が確認された。なおこれらはいずれも初期の癌であった。

#### (19) 視力・聴力

全員測定を行っており異常者は多いが、特に問題となるものはないので、判定は行なわなかった。

#### (20) そ の 他

例年と同じく、皮膚病、頸部リンパ節腫大などが若干みられたのみであった。

表25 婦人科

判定	年代別	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし		5	183	702	859	679	62	2490	90.6%
差支えなし				7	3	5		15	0.5%
要再検								0	0.0%
要経過観察			5	36	12	6		59	2.1%
要精密			16	41	22	20		99	3.6%
要治療			8	38	26	8		80	2.9%
治療中				5	1			6	0.2%
合計		5	212	829	923	718	62	2749	
有所見者数		0	29	120	61	34	0	244	
%		0.0%	13.7%	14.5%	6.6%	4.7%	0.0%	8.9%	

表26 婦人科異常

判定	内訳	膣炎	頸管ポリープ	子宮筋腫	卵巣腫瘍	細胞診 クラス3以上	その他
差支えなし		5	1	6	1		3
要再検							
要経過観察			2	45	12		6
要精密		2	10	31	34	12	9
要治療		71	4		1		3
治療中				4	1		
計		78	17	86	49	12	21
%		2.8%	0.6%	3.1%	1.8%	0.4%	0.8%

## ま と め

(1) 癌は、胃癌7名、肺癌4名、大腸癌4名、肝癌1名、胃癌1名、甲状腺癌1名、乳癌1名、子宮癌3名、計22名発見された。

(2) 発見胃癌は7名で、発見率0.13%となり、例年の半分以下であった。理由は不明であるが、逐年受診者が大部分を占めていることも一因かもしれない。しかし今のところ偶然と考えている。

(3) 肺癌はこのところ毎年コンスタントに発見されている。しかし必ずしも早期癌ではなく、継続受診者においても発見時すでに切除不能なものもあり、現方式での早期発見の限界を感じさせられる。その一手段としての

喀痰検査受診者をもっと大幅に増やす必要もありそうである。

(4) 発見大腸癌も増えてきており、数の多い偽陽性の問題をかかえながらも、検便の果たす役割は大きいと考えられる。問題となる低い精検受診率も徐々に増えてきていることは喜ばしい。

(5) 腹部超音波検診を導入してから5年目になるが、今回初めて肝癌及び腎癌の各1名が発見された。この検診は、術者の技術レベルによって大きく左右されるので、今後より一層経験を積み重ねて、精度を高めていきたい。

(6) 高尿酸血症は殆どが男性であるが、平成2年度までは徐々に減少していたところ、

平成3年度から増加傾向がみられている。その殆どは7.0~8.0mg/dlの軽度上昇とは云え、動脈硬化のリスクファクターの一つであり、肥満、高脂血症、高血圧、飲酒などの諸因子と絡み合い、食事との関連が深い因子である。食事指導の必要性を痛感する。

(7) 高脂血症特に高コレステロール血症の増加が目立つ。特に女性では以前より、50才以降急激な増加を示しており、最近特にその傾向が著しい。当センターの受診者の殆どは70才以下なので、心臓などの成績にあまり異常はみられていないが、老年期以降の虚血性心疾患への進展因子として極めて重要であり、徹底した生活指導が望まれる。

(8) 二次検診の状況をまとめると、要二次検診は男1,229人、1,580件、女1,243人、1,664件、合計2,472人、3,244件で、そのうち受検

したのは男768人(62.5%)、1,053件(66.6%)、女955人(76.8%)、1,280件(76.9%)、合計1,723人(69.7%)、2,333件(71.9%)であった。これを前年度と比べると、二次検診受診者が男性でかなり減少したが、女性は殆ど変わらなかった。結果は、異常なし・差し支えなし47.8%、経過観察34.9%、要治療15.4%、その他1.9%で、例年とほぼ同じ傾向であった。

## 文 献

- 1) 小川忠邦ほか：平成3年度日帰り人間ドックの成績。富農医誌、24：9、1993。
- 2) 肺癌細胞診判定基準改訂委員会報告：肺癌、23：653、1983。
- 3) 塚本 宏ほか：死亡率からみた日本人の体格、厚生指標、33：3、1986。